FAIRY TAIL マネっ子楽士と魔導士ギルド

アイミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　マネっ子楽士と魔導士ギルド

【Ｎコード】

Ｎ４７１７Ｔ

【作者名】

アイミア

【あらすじ】

学校の屋上から、飛び降り自殺。理由はいじめではなく・・・まあ、それも少しあるんだけど、一人になってしまったから。

どうして？　みんな、居なくなっちゃった。絶望して、街で一番高い場所で死のうと決めた、ら・・・。

え？　なに、転生って。私に何かいいことがあるの？　・・・お兄ちゃんが居る？　行きたい！

若干ブラコン気味の主人公、石動（いするぎ）　鈴（りん）の第二の人生が、ＦＡＩＬＹＴＡＩＬで始まります。

終わりは始まり

鮮やかな紅い空に、細くたなびく雲が流れる。
風が頬をかすめてふき、涙の跡がスースーと冷たかった。

どうして・・・？　どうして、みんな居なくなっちゃうの？

2年前に、目の前で死んだお兄ちゃん。去年、いきなり消えたお姉ちゃん。
そして、今度はお父さんとお母さんまで・・・！
視界が、涙で歪む。止めどなく溢れて頬を、胸元を濡らすが、私はそれを拭いもしない。

町で、一番高い場所。5階建ての学校の屋上。
ちょっと下を覗けば、遥か下にはいつも使っていた昇降口が見える。

・・・空が、紅い。今まで、見たことがないくらいに。
私は、ぼんやりとだけど、綺麗だな、と思った。
そのまま、紅い太陽を見つめながら、私は一歩踏み出して・・・

・・・世界が、反転した。

「おーい、起きとくれー」
「え？」

なんだか間延びしたような、聞いたこともない老人の声に、私はパ

ッと体を起こす。
え・・・え？　なんで、なんで？　だって、私・・・。

「確かに、あそこから飛び降りて・・・」
「・・・悲しいの。こんなに若くて未来あふれる娘が、自分から命を絶とうとするとは・・・」

すぐ隣からさっきの声がして、私はハッと振り向く。
そこにいたのは、悲しげに目を伏せた、白くて長い髭のおじいさん。
そして、その言葉の意味が頭に入ってきたとき、私は勢いよく立ち上がった。

「あなたがっ・・・！　あなたが、私を助けたの？」
「そうじゃ」
「どうして？　なんでそんなことっ！」

拍子抜けするほどに短く、事もなげに答えたおじいさんに、私は食ってかかった。
怒りと絶望とで、頭の中が紅くチカチカ点滅している気がする。
どうして・・・！

「・・・お兄ちゃんに、会いたかったのに・・・」

そう呟いた途端に、また涙が溢れ出した。怒りは消え、代わりにやってきたのは、胸の痛み。
・・・どうして？　どうして、私は1人なの・・・？

「・・・スマンのう、元はといえば、全てわしのせいなのじゃ」
「・・・え？」

つぶやきのような、言葉。心底申し訳なさそうなその声を聞いて、私は思わず聞き返した。

「元はといえば・・・一番最初に、おぬしの兄が死んだのは、わしのせいじゃ。わしの、管理力不足のな」

「え・・・それって、どういう事？」

尋ねるが、おじいさんは答えない。

「おぬしの姉が、よもや勇者の素質を持っているとは気づかんかった。

おぬしの両親が、早死する運命にあるとは知らんかった。

・・・そしてなにより、おぬしが世界から疎外されている存在だとは、全く、夢にも思わんかった。

せめて、それらに気づいていたら、あんな事はしなかったのじゃが・・・。

そんなこと、今さら言っても、虚しい言い訳に過ぎぬか」

とつとつと、呟くように。それは、本当に悲しげで・・・私は思わずおじいさんの顔を見つめた。

「聞いて、くれるかの？」

おじいさんは、じっとこっちを見つめる。私は、コクンと頷いた。

「そうか・・・そうじゃの、実はわし、神なんじゃ。そして、ここはもうすでに、現世ではない。

・・・まあ、おぬしはそんなこと、気にも留めぬじゃろうが。

簡単に言うとな？　・・・わしは、間違ってしまったんじゃ。

間違って、死ぬはずのない人間を、殺してしもうた。それが、おぬしの兄のわけじゃ。
この程度の間違いは・・・と言ったら、怒るかの？　まあ、よくやることなのじゃが、大抵は、好きな未来・・・よくあるのは、漫画やアニメの世界への転生じゃな。を、選ばせ、望む能力や生まれを与えれば、大体の者は満足して第2の人生を送ってくれる。
おぬしの兄にも、同様の処置を取り、満足して別の世界へ旅立った。
・・・やはり、おぬしや姉、両親の事を心配しているようだったがの。じゃから、わしはおぬしとおぬしの家族を見守ると、約束したんじゃ」

そこで一旦言葉を切り、まっすぐにこちらを見つめるおじいさん・・・神さま。

・・・そうか、それで私が死んだ時、すぐに拾えたんだ。
普通の自殺の人なんて・・・こう言っちゃなんだけど、神さまが一人ひとり気にしてる訳ないと思う。

「ところが、今度はおぬしの姉が消えた。文字通り、世界から存在自体が。
・・・召喚された、の方が正しいかの？　高い勇者の素質を持っていたから、異世界に救世主として喚ばれたんじゃと、後から気づいた。
わしは、勇者になったのなら仕方がない、両親と末娘が1人でも、今は辛くとも、今後生活するのに問題はないじゃろう、と思ったんじゃ。じゃから、特に何をするでもなく、その時は放っておいたんじゃよ。

・・・しかし、おぬしの両親も交通事故で死んでしもうた。そし

て、その時ようやっと気づいたんじゃ。おぬしが、世界から疎外された者、世界から忌み嫌われておる者じゃとな。
　世界から忌まれるということは、如何なる者にも嫌われる、ということじゃ。・・・前から、その兆しはあったんじゃが。わしは、それに気づかんかった。
　こうしてみると、わしの気づかない事の、なんと多いことか！
慌てておぬしを探したんじゃが、おぬしは、自らの命を絶った後じゃった。
　わしは、せめて魂だけでも・・・と思って、おぬしをここへ・・・
わしの世界、神界へ連れてきた。
　・・・そして、今に至るのじゃ」

神さまは、語り終えた。・・・え、どういう事？
いや、内容自体は分かるんだけど・・・とても、信じられない。
お兄ちゃんが死んだのは間違い？　お姉ちゃんが勇者？　そして・・・
・私が、世界に嫌われている？
・・・確かに、異様に運がなかったり、犬猫にも嫌われたり、それにその、いじめられっ子だったりして、私って神さまに嫌われてるのかな、とか思わなかったわけじゃないけど。
まさか、神じゃなくて世界に嫌われてたとは・・・。

あれ？　でも、だったら・・・

「なんで、お父さんとかは私のこと嫌わなかったの？」
「そんなのあたり前じゃろ。家族は、家族なんじゃから」

素朴な疑問を口に出すと、即答された。そっか、そういうもんなのかー。

「・・・というか、思ったよりショックを受けていないのう？」

「まあ、ねえ・・・むしろ、今まで不思議に思っていたことがいくつか解って、ちょっとすっきりした」

そう答えたら、神さまは不思議そうに、懐かしそうに首をかしげ、目を細めた。

「さすがはあやつの妹、といったところかの？　心の芯がまっすぐじゃ」

「お兄ちゃんも、こんな感じだったの？」

「そうじゃの・・・それほど、怒ったりはしなかったのう」

ふーん・・・。まあ、お兄ちゃんらしいかな？

「・・・おお、そうじゃ。わしがおぬしに出来ることが1つ残っておった。

おぬし・・・転生、してみんか？」

「え？」

いい事思いついた、という風に、手を叩いてから、いきなりそんな事を聞いてきた。

転生って、あの転生？　お兄ちゃんもしたって言う・・・。なんで？

「・・・それも、おぬしの兄と同じ場所にじゃ」

「やりたいっ！」

もったいぶって付け足された次の言葉に、私は思わず即答してしまった。

あ、しまった。でも、お兄ちゃんに会いたいし・・・。

「そうか、そうか。素直で良いことじゃ」

神さまは、嬉しそうにニコニコ笑う。

・・・なんかいきなり、神さまというよりおじいちゃんって感じになったんだけど？

「じゃったら、まずは能力と生まれをなんとかせんとの。・・・どんなのがええかのう？」

「能力って・・・」

別にいいんだけどな。・・・あ、もしかして、お兄ちゃんが生まれたのって漫画の世界？

だったら、お兄ちゃんが読んでたのってバトルシーンとかいっぱいあるのばっかだし、ないとちょっと危ないのかも。

うーん、でもなあ・・・。

「えっと、じゃあ今持っている技能とかを高めてくれる？　運動神経とか、リズム感と音感とか・・・

・・・あと、マネっ子スキル、って解かる？」

家族内と、本当によく話す人の間だけで使ってた言葉なんだけど・・・。

「マネっ子スキル、というのは、見た他人の特技、仕草、声などをそっくり真似（コピー）できるという、あの特技のことじゃな。

問題なしじゃよ。むしろ、ただの特技から超能力の域までグレードアップさせとくの。これからは、魔法じゃろうが剣術じゃろうが、他人の特殊能力も体質も全部完璧に真似できるぞい！

と、いうより、その程度じゃったら始めからやるつもりじゃよ」

おお、太っ腹。というか、初めからって・・・事もなげに言ったけど、このスキルってかなり便利なんだよ？
それがさらにすごくなるって・・・どうなっちゃうんだろ？

「さてさて、ここで１つ教えると、おぬしの兄が行った世界は、『ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ』という漫画とアニメの世界なのじゃが・・・
おぬしは、どんな魔法が使いたいかの？」

魔法と来たか。何がいいかな・・・自分の特技を生かせるのが良いよね・・・。

「２つっていいかな？」
「もちろんじゃよ」
「じゃあ、容量無限時間の経過関係なしの亜空間とかってあり？
出入口は自由に設定出来るの」
「ふむふむ・・・それは便利そうじゃの。他には？」
「えっと、音を力に変える魔法がいいかな？」

私、一応吹奏楽部所属だったので、楽器は結構扱える。打楽器だけど。後は、バイオリンと篠笛と、コントラバスを少し？
音色を力に変えて、攻撃とか防御とか・・・あと、仲間のパワーアップ？　うん、いいなそれ！

「了解じゃ。単純に力だけではなく、炎や水、氷、風、光、闇にも変換できるようにしておくの」
「あとあと、今から言う楽器が欲しいな。ええっと・・・」

・・・

「まあ、このぐらいかな・・・」

「ずいぶん多いのお」
「ダメ？」
「そんなわけないじゃろ」

後は特に・・・そう考えて、はっと気づく。
そうだ、しまった。これを忘れるなんて、どうかしてる。

「凪香（なぎか）。神さま、私の家から凪香とってきてくれる？」
「うん？　・・・ああ、あの刀かの。よしよし、待っておれ・・・」

そう言って、シュンっと消える神さま。

凪香。私の刀、私の友達。さっきも言ったけど、忘れるなんてどうかしてる。
私の家、石動家は代々続く武術と剣術の名門。６歳になったとき、生涯のパートナーとも言える刀を、蔵の中から選ぶ。いろんな意味で普通とは違う刀が、石動本家の蔵には１００近く仕舞ってあって、その中から、気に入ったのを選べる。私は、それが凪香だったわけ。
まあ、刀と言っても・・・

「ほれ、とってきたぞい」

・・・懐剣なんだけどね。２０ｃｍ弱の黒い鞘の両端に、浅葱色の輪飾り。シンプルな作りで、鞘を含めても羽根のように軽い。比喩じゃなく。ここで抜くつもりはないけど、刀身はとっても綺麗だよ。お兄ちゃんの夜杜（よもり）やお姉ちゃんの真白（ましろ）にも、勝るとも劣らない。むしろ、私は凪香がいちばんキレイだと思う。だって、夜杜は黒いし、真白は白いし・・・。

「・・・ごめんね、置いてっちゃうとこだった」

ホウ・・・

話しかけると、淡く浅葱色に輝いた。それと呼応するように、私自身も光を帯びるのが分る。
これが、石動の刀の、特に普通じゃないところ。心を持ち、光を持つ刀。
言葉なしでも解かる。彼女が、笑っていることが。凪香も、きっと解ってくれてる。
私が彼女に選ばれた、私が彼女を選んだことが、私の誇り。なんだけど・・・
・・・絶対に、人前には出せないよね。てか、喋っちゃダメ。光ってもダメ。飛んでもダメだからね！

『・・・そんなに念を押さなくても、飛ばないし喋らないよ。たまに光るかも知れないけど・・・』

と、凪香が呆れたように言った。ついでにプルプル震えて、浅葱色に光ってる。・・・あ。

「ダメって言ったのに。言ったのにっ！」
『わ、解ってるよ！　ここあたしと鈴と神しかいないしさ！　解ったから、輪飾りをひねるなぁっ！』
「・・・別に、わしはその刀に人格があることぐらい知ってるんじゃが・・・」

・・・もう、しょうがないね。私は、凪香の浅葱色の輪をねじるのを止める。

「・・・では、そろそろ行くかの？」
「うん・・・」

もうすぐ、お兄ちゃんに会える。そうしたら、もう絶対に1人はいや。

・・・この神さまとも、お別れだね。ちょっと寂しいかも・・・。

「なに、またいつか会えるじゃろ。少なくとも、寿命が来たらまたここに来ることになるじゃろうし」

「え、そうなの？」

「普通は来ないんじゃが、おぬしの場合は特別じゃな。身近で3回も転生や召喚が起きているからの」

そーなんだ・・・。だったら、いいや。

「じゃあねー」

ぴ、と手を振る。神さまもひらひらと手を振って・・・視界が消えた。

再会と（前書き）

展開が変です。何故にこうなった・・・。

再会と

頬を、さやさやと風が撫でる。
あれ・・・？　なんで私、外で寝てるんだっけ・・・？
でも、どーでもいーや。気持ちいいし・・・。

またうつらうつらとしだして、ふっと眠りそうになった途端に。

「おい、こんなところに誰か居んぞ。行き倒れか？」

ふっと、目の前に影が差した。というか、そばに誰かが立った。
誰？　声からして、男の人っぽいけど・・・。

「おい、お前。大丈夫か？」

そう言って、男の人は私を軽く揺さぶる。何故か、その手はひんやりと少し冷たかった。
・・・ううん、手自体が冷たいんじゃない。なんだろう？　冷たい何かが、体の中にあるみたいだ。

というか、行き倒れてるの？　私。それはさすがにマズイ。見知らぬこの男性にこれ以上心配かけないためにも、早いとこ起きないと・・・って、あれ？
体を起こそうとしてみたけど、何故だか全身に力が全く入らない。
踏ん張ってみようとしても、ちょっと声をだそうとしても、ビックリするぐらいか細い声が「うう・・・」と微かに漏れるだけ。
まるで、自分の体じゃないみたいだ。私、どうしちゃったの？

「・・・おいおい、相当衰弱してるみたいだぞ」

「まあ大変。急いでギルドに運びましょう！」

慌てたような男の人の声。それに優しそうな女性の声が答えた。

ギルド？　疑問に思っている間にいきなり担がれて、びっくりして眠気は吹っ飛んでしまった。

・・・その割には、やっぱり力が入らない。目を開けることすら出来ない。

あれー？　なんだってこんな事に・・・あ、そっか。私、お兄ちゃんと同じ世界に転生して・・・。

じゃあ、ここは異世界？　神さまの言葉通りなら、ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの世界って事になる。

あの漫画は、私もお兄ちゃんに勧められてひと通り読んでみたけど、結構色々危ないよね。呪歌（ララバイ）とか、ＶＳ幽鬼（ファントムロード）の支配者とか、ニルヴァーナとか・・・。

お兄ちゃんは、ナツと一緒にいるのかな？　そもそもフェアリーテイルに居るのかな？　今って、原作で言うといつで、一体どこなんだろ？

そしてそして、今私を担いでいるのは誰？　ギルドとかなんとか言ってたけど、どのギルドの人？　と言っても、私は漫画に出てくるのしか知らないけど。

・・・ああ、わからん。せめて周りが見れたらな。頭はだいぶすっきりしてきたけど、体は相変わらずだるい。もうむちゃくちゃダルい。

一体どうしたらいいんだろ？　というか、そのギルドにはまだつかないわけ？　私を担いでる人。

・・・体感時間が、狂ってる気がする。じゃなかったら、この人どんだけゆっくり歩いてんの。一歩踏み出すのに、２０～３０秒ぐらいかかってるよ？

・・・暇だな。考えることもないし。暇暇、ひまひまひまひまひま

ぁっ！

ギイ・・・

と、暇のあまり頭の中で暴れていると、―（体はまだ動かせません。どうなってるの？）ようやっと建物に入ったみたいだった。扉の音がしたし、なんとなく暗くなった。といっても、ほんの少しだけど。ざわざわと、周りが騒がしい。本当にうるさい。・・・ここって、もしかして・・・。

「おお、ようやく帰ってきおったか」

「うん？　グレイにミラ、一体その子は誰だ？」

「というか、どっかで見たような顔だな」

老人の声と、おっさんの声×2。

・・・というか、グレイにミラ？　この人達が、グレイとミラジェーン？　ということは、ここはフェアリーテイルなの？

うー、周りが凄く見たい。だけど、目があけられないし首も回せない・・・指一本動かせない。

なんで？　体力には結構自信あったのに・・・やっぱ、転生の影響かなあ？

「町外れに、倒れてたのよ。一応意識はあるみたいなんだけど、ぐったりしてて、それになんだか・・・マスター、ちょっと診てもらえませんか？」

「ん？　別に構わんが・・・」

マスター・・・ってことは、この老人の声はマカロフさんか。私が診てもらう？　どの辺を？　マカロフさんて、お医者さんじゃないよね・・・。

（たぶん）グレイは私を担いだ・・・というか、背負ったままゆっ

くりと移動―（やっぱ、体感時間が・・・）して、どこかふんわりしたところに私を降ろした。というか、私寝かせられた。
なんだろ？　ここ。ベッドかな？　確か、フェアリーテイルって医務室があったような・・・。

「どれ・・・む？！　これは・・・」

え、なに？！　驚いたような、だけどそれだけじゃない声色。なんか、すごーくやな予感がするんだけど。

「なんなんだよ、じいさん。こいつ、どっか悪いのか？」
「・・・強力な呪い、というより、何か悪質なモノがとり憑いておる」
「なっ？！」

え、えええええっっっっ？！？！？！　なにそれ！　転生早々私ピンチ？

「やっぱり・・・」
「もし、このままほっといたら、どうなっちまうんだ？」
「どうやらコレは、魔力と体力をすごい勢いで吸い取っているようじゃから・・・
・・・放っておいたら、３日は持たんじゃろう」

・・・何？　余命宣告？　私、転生して３日で死ぬの？　まだお兄ちゃんにも会ってないのに？
やだよ、そんなの。なんとかならないの？　ポリューシカさんとか、どうにかできそうだけど。

「そんな・・・何とかできませんか？　マスター」

「わしには、どうしようもできん。ポリューシカなら、あるいは・・・じゃが、やつは今いないようじゃからな」

まさかのポリューシカさん不在？　え、じゃあホントに私ここでジ・エンド？

ごめんね、お兄ちゃん。結局会えないみたい。神さま、どうやら意外と速く再開できるみたい・・・。

・・・と、思考が諦めの方向に行こうとしたとき。

「どうしたんだ？　なんか闇に近いのがあるみたいだが」

不意に、どこか懐かしい声がした。心臓が、トクン、とひとつ鳴る。

この声は、まさか・・・？

「お、コウ。帰ってたのか」

「今さっきな。で、一体何があるんだよ？　さっきから夜杜が騒いで仕方ないんだが・・・」

コウ・・・倖？　石動　倖？　それに、夜杜？　それは・・・お兄ちゃんの刀の名。

じゃあ、じゃあ。この声は。記憶よりも少し低くなって、だけど温かいこの声は。

「ああ、なんかこの子が行き倒れてたのを拾ったんだよ」

「行き倒れぇ？　何だってこんなところで・・・な？！」

・・・お兄ちゃん？　お兄ちゃんなの？　そこにいるの・・・？

会えた。とても嬉しい。だけど、私は声も出せないし、目も開けられない。・・・私にとり憑いている何かのせいで。

なんで、なんだって私に憑くの！？　寄りにもよって、今、私に？！

「なんじゃ、コウ。知り合いか？」
「知り合いっつうか・・・。何だってこんなところに？」
「・・・知り合いだってんなら言うが、こいつ、もうあまり長くないみたいだぞ」
「なッ？！　なんでだよ！」
「何か、悪質なモノに魔力と体力を奪われているのよ。助ける方法は、解らないわ」

そう、ミラさんが言うたびに。お兄ちゃんが唇をかむような音が聞こえるたびに、死ぬということが、実感として湧いてくる。
実際、秒単位で命が削られていっているみたい。ただダルいだけだったのが、なんか・・・なにか、抜けていくみたい。
それは、そう。凪香の光のようなもの。私の中に満ちていたはずの力が、刻々と消えていく。
もう・・・ダメみたい。

『・・・おい、倖。俺を抜け』
「え？」

と、場に凛とした声が響いた。驚いたように、お兄ちゃんの声。
この声は、なんだろう？　他の声と、響き方が違う。・・・なんか、凪香の声と同じ感じの・・・
・・・！　そうか！

「おい、夜杜、いきなり何を・・・？」
『言わないと、解らないか？』
「え・・・あ、そうか！」

チャキ　刀を抜く音。多分、夜杜。・・・そっか！

夜杜は・・・石動の刀は、光を纏う刀。闇を祓う刀。さっきお兄ちゃんが、私にとり憑いているのは闇に属するものだって言ってたから・・・！

「な、何をする気じゃコウ！」
「この子に・・・鈴（りん）に憑いてる奴を、叩っ斬る」
「そんな事出来るのかよ？！」
「というか、鈴って・・・やっぱり、知り合いなのか？」

ブン・・・　大気が、揺れる。光が集まるのが、体でわかる。腰に下げていた凪香が、夜杜の光を受けて微かに震えた。

「ああ。大事な・・・妹だ」

シャンっ　涼やかな音ともに、光が私の体を包み、すうっと胸に巣食っていた何かが、抜けていった。
体が軽くなって、そして・・・。

「・・・お兄ちゃん」

目の前に、少し大人びたお兄ちゃん。

「・・・鈴。大丈夫か？」
「ん。・・・だいぶ楽になった」

よいしょ、と体を起こす。ベッドに座ったまま上半身をひねる運動をする。
さらに、ポンっとベッドから飛び降りて、跳ねたり屈伸したりしてみる。
・・・うん、大丈夫。むしろ一瞬でここまで回復したのが不思議な

ぐらい。
やっぱり、夜杜の光のおかげかな。元々石動の刀の光は、石動の血筋を守るためのものだからね・・・ま、こういうこともあるかも。

『あーっ？！　夜杜！　居た！』
『居るだろ、普通。倖は俺の主だぞ？』
『あ、あんたねぇ・・・あたしと真白が、どんだけ心配したと思ってるの！』
『いや、知らん。それに、俺がここにいるのは不可抗力だ』
『何よそれ！　あのね、そもそも倖が居なくなって、鈴がどんだけ悲しんだと・・・』
『いや、それ俺に関係ないだろ』

凪香と夜杜は、なにやら言い争いをしてる。・・・というより、一方的に凪香が怒鳴ってる。
凪香の黒い鞘によく映える浅葱色の光が、激しく炎のように揺れ、お兄ちゃんが抜身のまま持っている夜杜は、藍色の光を静かに宿している。・・・正直、凪香の光で目がチカチカする。

「なんじゃ？　あれも、夜杜のような喋る剣なのか？」
「というかコウ、妹なんて居たのか」
「道理で、どこかで見た顔だと思ったわ」

そして、グレイやミラさん、マカロフさんは、呆然とした表情。ミラさんは、むしろ苦笑に近いかな？
・・・って、ああっ！

「喋っちゃダメって、言ったのに！」
『あ。しまった・・・って、いててててっ！？
ごめんッ！　わざとじゃないんだよ！　わざとじゃないからだか

ら輪を捻るなってのっ！』
「今のの何処がわざとじゃないって言うの？！」
『ぎゃあっ？！　い、いててててててっ！　や、やめ』
「・・・あー、鈴？　ギルドのみんなは夜杜のことも知ってるし、別に大丈夫だぞ？」
『同士（なかま）が痛がっているのは、見てるこっちが辛い。そろそろ止めてやってはくれないか？』

・・・っちぇ、お兄ちゃんと夜杜がそこまで言うなら・・・。
輪から手を離すと、凪香はほっとしたように光を揺らした。

「・・・随分とまた、仲がええのう」
「ホントに。コウと夜杜みたいですね」
「仲がいい？　アレが？」

マカロフさんとミラさんが笑う横で、怪訝そうな顔のグレイ。
まあ、端から見たらいじめてるみたいだけど、戯（じゃ）れてるだけなんだからね？　一応。
・・・というか、お兄ちゃんと夜杜もこんな感じなの？　それとも、刀と人で仲がいいってことが同じ、ってだけ？
ほう、とため息を付いて、夜杜を収める。

「というか、鈴！　お前、何だってこんなところに居るんだよ！」
・・・と、お兄ちゃんがいきなり思い出したように怒鳴った。
何よ、そんなに怒鳴らなくてもいいじゃん。

「何って、お兄ちゃんを追いかけてきたの。お兄ちゃんに会いに来たの。
とある親切なおじいちゃんが、ここまで届けてくれたんだよ」

悪い？　軽くお兄ちゃんを睨みつける。暗に、神さまに転生させてもらったことを強調して。
お兄ちゃんは、一瞬言葉に詰まって、そしてさらに大声で怒鳴った。

「鈴、お前、ここに来ることの意味を解ってるのか！　来てしまったら、もう二度と戻れないんだぞ！
　オレはもう向こうにはいられなかったからいい、というか仕方ないが、お前には未来があったじゃないか！
　たった一人の為にここに来たせいで、父さんにも母さんにも姉さんにも、もう二度と会えないんだぞ！」

・・・ああ。そうか。お兄ちゃん、知らないんだ。
姉さんが消えたことも、お父さんとお母さんが死んじゃったことも。
そして、私が一人になったことも・・・。

「今ならまだ間に合うかも知れない。だから、家族のためにも、友達のためにも、さっさと帰れ」

・・・何にも知らないお兄ちゃんは、そう言って私を見つめた。

「・・・なんにも、知らないくせに」
「え？」

搾り出すように呟いた私の声を聞いて、お兄ちゃんは驚いたような声をあげた。
ふつふつと、怒りが湧いてくる。呼応するように、ぎゅっと握りしめた凪香も光を放ち出す。
お兄ちゃんは、それを見て反射的に一歩下がり、夜杜の柄（つか）に手をかけ、戸惑ったように私と凪香を交互に見つめた。

「鈴？　凪香？　一体どうしたんだ？」
『・・・一体、何に怒っている？』
お兄ちゃんと同じく、戸惑っている様子の夜杜。しかし、ゆらり、と藍色の鋭い光を纏う。
・・・自分でも、なんだか殺気立っているのは解ってる。だから、お兄ちゃんも夜杜も臨戦態勢に入った。
凪香は、いつでも戦えるような、炎のような激しい光を纏って、激しい怒りをこちらに伝えてくる。
「ちょ、え？」
「お、おぬしら一体何を始める気じゃ？！」
「まさか、今からここで戦り合おうって気じゃ」
3人が慌てているが、そんなの知ったことじゃない。ああでも、流石に建物壊すのはマズイかな？　助けてもらったんだし。
「表に出なさい、石動　倖」
ビックリするぐらい冷たく、鋭い声。ゆらゆらと揺れる凪香の光と、同じ色の光が全身から立ち上る。
「んなっ？！　おい、ホントにどうしたんだよ！」
そう言いながらも構えを崩さず、自身も藍色の光を纏わせるお兄ちゃん。心なしか、顔が引き攣っている。
だけど、私はそれに構わず、叩きつけるように告げた。
「石動流剣術及び居合術師範、石動　倖に、同じく石動流槍術及び

柔術師範、石動　鈴が実戦試合を申込む！」
「・・・はあっ？！」

お兄ちゃんが、素っ頓狂な声を上げる。・・・そりゃそうだよ、実戦試合なんて、余程のことが無い限り申し込まないもの。
実戦試合。石動流にのみある試合形式で、自身の技がどれだけ実用的なものなのか、知るためのもの。
実際に戦えるかを確かめるものなので、相手を殺めてしまわなければなんでもあり。武器の使用はもちろん、この試合をやっている間は『卑怯』などの言葉は禁句となる。
・・・まあ、最近では、家の中で意見が割れたとき、どちらの意見を通すかとか決めるとかにも使うけど。

「な、何を言い出すんだよ？！　そんなの、受けるわけ・・・」
「なに、断るの？　お兄ちゃん。それはつまり、実戦では私に勝つ自信がないって受け取って良いのかな？」
「・・・なんだと？」

ありふれた挑発をすると、お兄ちゃんの気配が変わった。触れたら切れてしまいそうに、鋭い殺気と藍色の光。
夜杜も同様に、とりあえずで纏っていた光を、さらに鋭く変化させる。

「・・・解った。石動　倖、その試合を受けよう」
「お、おいやめろよ、お前ら」
「そうよ、喧嘩はやめて！」
「お２人は、黙っててもらえませんか？　これは、私とお兄ちゃんの問題です」

流石に止めに入ってきたミラさんとグレイの言葉を、切って捨てる。

「・・・ちょっと、広いところに行こうか」
「ああ、そうだな。ここじゃ狭すぎるし、なによりギルドを壊すわけにはいかない」

お互いに距離を保ったまま、光も殺気もそのままに、じりじりとギルドの外へ移動する。
その様子を見た他の人達がなにやら騒いでいたけど、なんか観客が増えたけど、気にすることはない。

ギルド前の大通りで、対峙する私とお兄ちゃん。心配そうだったり、面白がっているようだったり、こちらをじっと見つめているギルドの人々と、いつの間にか集まっていた町の人々。

「・・・なんか、ギャラリーが増えちゃったね」
『まあ、止めるつもりは全くないけどね！』

煌々と光を放ちながら、凪香はそう声を上げる。
それに対して、ここに来てまた戸惑う様子を見せ始めたお兄ちゃんと夜杜。

「・・・なあ、なんで怒ってるんだ？　全然解らないんだが」
『ふん！　そうやって全部「解らない」で済ますから嫌なんだよ！　もうちょっと自分で考えて！』
『むしろ、助けたのにこの態度はどうかと思うぞ』
「ああ、そうだね。たすけてくれてどうもありがとう」

明らかに激怒している凪香の言葉に、「考えてるんだけどなあ」とつぶやきを漏らすお兄ちゃん。

そして、私の言葉に『棒読み・・・』と呆れたような、若干怒ったように言う夜杜。

「・・・ふっ！」

「んなっ？！　いきなりかよ！」

隙ありと見て、私はお兄ちゃんに向かって大きく一歩踏み出し、凪香を鞘に収めたまま、柄頭一（？）の方でお兄ちゃんの顎を狙って、大きく腕を振り抜く。凪香の軌跡に、浅葱色の光が残る。お兄ちゃんは、わずかに上体を反らしてそれを躱した。

「・・・合図もないのかよ」

「『卑怯』、は禁句だよ？」

「そんな事・・・わかってらぁ！」

腰を低く構えていたお兄ちゃんは、その言葉と共に目に見えない程のスピードで、斬撃を繰り出した。

居合！　足元、胴、首を狙った3度の斬撃を、私は跳ね、横っ飛びに回転して躱す。

「・・・さすが、師範の免許を持ってるだけはある、かな？」

「そっちこそ。まさか躱されるとは思わなかった。腕をあげたな」

「まだまだ・・・これからだよッ！」

隠形術の歩法と神さまに底上げしてもらった身体能力を駆使して、一瞬でお兄ちゃんの背後に回る。素早く足払いをかけようとしたが、直前で反応された。繰り出された鋭い回し蹴りを間一髪で避ける。

単純に近接戦だと、お互いが良く知っている分、埒があかないか。

だからって、ここで凪香を抜いても同じこと。

だったら・・・・！

「凪香ぁッ！」

『了解ッ！』

凪香を握った左手を前につき出すと、ゴウ！　と強い風が吹き荒れる。正確には、風みたいな光、だけどね。

「くっ・・・・！」

『倖！　来るぞ！』

夜杜が警告するけど、はたして反応できるかな？　・・・・といっても、私もコレやるの初めてなんだけど。

一瞬怯んだお兄ちゃんの眼前に一瞬で移動しながら、凪香を腰のベルトの、いつの間にやら付いていたケースに戻す。

シャンッ　手元にあの亜空間の入り口を作り出し、その中から楽器を1つ両手の上に落とす。しっかり構えて。

バァンッ！

「グッ？！」

顔の目の前で、思いっきり鳴らしてやった。音から生まれた力が、顔面に直撃する。

今使ったのは、クラッシュシンバル。音がでかいから、攻撃力が高いかな、と思ったのと、持ったまま素早く移動できるから、これを選んだ。

バァン、バァン、バァンッ！　お兄ちゃんが衝撃によろめいているうちに、また2度3度。

クラッシュは重いけど、一応、中学の時は・・・というか、死んだ

ときは中3だったんだけど、吹奏楽部で打楽器(パーカス)やってたからね。それに武術も結構やってたし、腕力にはちょっと自信がある。連続で、よく響かせて鳴らすのなんて、わけないよ。できてあたり前。

そして、まだ怯んでいるうちに・・・！

「なんだ？　今のは・・・音、衝撃波？　まさか魔法を「お兄ちゃん？　この状態で、まだそんな無駄口叩く気？」なぁっ？！」

『・・・やられた・・・』

凪香を抜き放ち、激しい浅葱色の光をまとった、淡い銀の透き通った刀身を、お兄ちゃんの首筋に当てた。

お兄ちゃんは驚き、夜杜は悔しそうに呟く。そして、フッと纏っていた藍色の光を緩め、四散させた。

「・・・すげぇ」

「あの嬢ちゃん、コウに勝っちまった！」

「1分も経たなかったな」

と、一瞬の間を置いて、観客が歓声をあげた。中には、負けたーっ！　とかくっそぉオレコウに賭けてたのに・・・とか色々聞こえるので、どうも賭け事が行われていたようだ。

ほとんどがお兄ちゃんが負けて悔しがる声だけど、まあそれも無理もない。お兄ちゃんは前からこのギルドにいた―（と思われる）青年で、私はいきなりやって来た子ども。武器(えもの)だってお兄ちゃんがちゃんとした日本刀なのに対し、私のは小さな懐剣。これで私の勝ちを予想してる者は少ないだろう。

光を解かずに、凪香を首筋に当てたまま、お兄ちゃんの目をじっと見つめる。

しばらくそのままで居たら、ついにお兄ちゃんはため息と共に目をそらした。

「わぁった。わかったよ。オレの負けだ。帰らなくてもいい」

やったぁ！　その言葉を聞いて、私はにっこり笑って凪香を収め、纏った光も解こうとした。けど。

次の言葉を聞いて、硬直した。

「だが、1度軽く思っただけことで、こんな事を決めちゃっていいのか？　向こうに居たほうが、家族も友達もいるのに・・・」

え？　何を・・・何を言ってるの？　―この人（お兄ちゃん）は。

今、なんと言ったの？

1度軽く思っただけ。

・・・ああ、要するに。

「なんにも・・・なんにも、わかってないわけね」

「ん？　どうしたんだ・・・わあっ？！」

ゴウッ！　凄まじい音を立てて、全身から光が吹き出す。お兄ちゃんは驚いて大きく一歩飛びずさった。

目を白黒させているお兄ちゃんと、再び光を纏う夜杜。ざわざわと周りの人達が騒ぎ出す。

「ちょ、なんだよ！　勝負はついただろ！」

「なんにも、知らないで・・・そういう事言うわけ？」

先程までの激しい光を、鋭く変化させた凪香を握り締め、ゆっくりと鞘を抜く。自分の周りでは、浅葱色の光がゆらゆらと、どこか禍

々しく揺らめく。
その様子を見て、お兄ちゃんはさっと青ざめた。
「お、おい・・・ちょっと待て！　とりあえず、な。話せばわかる」
顔を引きつらせて、そう言いながらゆっくりと後ずさる。2歩、3歩。その動きに合わせて、私もゆっくりと歩みをすすめる。
「なにが、わかるというの？　解っていないのは・・・お兄ちゃんの方でしょ！」
そして、お兄ちゃんの首を狙い、凪香を両手で振りかざし・・・力いっぱい突くように腕を動かした。
お兄ちゃんは、足をもつれさせてその場に仰向けに倒れこみ、それを紙一重で避ける。
怯えたような、訳のわからないものを見るような目で、こちらを見つめるお兄ちゃんを睨みつけ、その腹を思いっきり蹴りつけた。
「グゥッ・・・！」
「なんにも、知らないくせに・・・解ろうともしてなかったくせに・・・偉そうに・・・知ったような口を利かないでよ」
一言一言区切りながら、ゆっくりと踏みつける。そのたびにお兄ちゃんが苦しそうなうめき声をあげた。
「おい、ちょっと待てよ！　勝負はもうついただろうが！」
何故か半裸のグレイが割り込んで、私を突き飛ばそうとするが。
「・・・邪魔」

「な?！　うわあッ！」

凪香が巻き起こす光の奔流に、為す術も無く吹き飛ばされる。
私は、ゆっくりとした動作で凪香を振りあげて。

ギンッ！
凪香の刃が、硬い物・・・地面のレンガに当たって鈍い音を立てた。
息を飲む、周りの人々。

「ッ・・・！」

お兄ちゃんは、自分の顔の真横に突き刺さった、鮮やかに光を放つ凪香を見て、硬直している。
そして、私は・・・。

「うっ、く・・・」
『鈴・・・』
『鈴・・・？　お前・・・』

「・・・なんで、泣いてるんだ?」

何故か、涙が止まらない。後から後から、お兄ちゃんの顔やら胸やらに落ちていく。

「どうして、だろ?　わかんない、けど・・・すごく、悲しいんだ。寂しいんだ」
『・・・・・』

息を詰まらせる私を案じてくれているように、いつの間にか光を淡く穏やかなものに変化させた凪香は、リン、と涼やかな音を鳴らす。

「・・・友達なんて、いなかったの。家族しか・・・お兄ちゃんと、お姉ちゃんと、お父さんとお母さんと、凪香達しか、私にはいなかったの」

誰に向けてでもなく、私は呟く。声が、手が震えて、視界が歪んだ。胸が苦しくて、何も喋れなくなってしまいそうで・・・私は、涙を拭い、大きく息をして、前を、お兄ちゃんを見つめた。

「誰も、居なくなっちゃったんだ。みんな、私を置いていっちゃった。もう、あの世界には、私を案じてくれる人はいない。あそこはもう、私の世界じゃないの。・・・きっと、始めから、私の世界じゃなかったんだ」

そこまで言って、また言葉を途切らせる。
こんな事言って、どうなるの？　という思いと、もっと早くから言うべきだったという思いが、胸の奥で渦巻く。
お兄ちゃんが嫌い？　お兄ちゃんが好き？　自問自答を繰り返して、あとに残ったのは。

「それでも、帰らなきゃだめ？　こっちで、ちゃんと新しく友達作るから。だから・・・」

・・・ねえ、そばに居させてよ。
最後の言葉は、囁くように。ちゃんと、聞こえたかな？

わあぁっ
と、いきなり周囲から歓声が上がった。な、なに？！

「・・・鈴」

「おにい、ふわっ?!」

驚いて顔を上げると、したで寝っ転がっていたお兄ちゃんが、ぎゅっと私を抱きしめた。

え、え、ちょ?!

「ごめんな、鈴。気づいてやれなくて・・・大丈夫。今度は、ちゃんと一緒にいるからさ」

耳元で、優しく囁かれる。・・・本当?

「ホント? ありがと、おにい・・・」

にっこり笑って、返そうとしたら、ぐわんっ、と視界が歪んだ。

力が、抜ける? あ、やっぱり病み上がりで無理な動きしたからかな・・・。

「鈴っ?!」

お兄ちゃんが驚いて叫ぶ声を聞きながら、私は意識を飛ばした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4717t/

FAIRY TAIL マネっ子楽士と魔導士ギルド

2011年10月8日14時33分発行